

仰候は、若き者共能心得候へ。父の敵君の敵兄の敵など、申ものを打申には、武へん名聞は曾て無之事に候。女を頼候ても打申が肝要にて候。六郎五郎が父も、自分に打可申と存候て時節おくれ、終に打をこなひ申候。此は若氣にて悪敷心得にて候。君父・兄の敵などを一刀にて打候ても、手柄と申儀にても無之、又人を頼候てもおくれと申にても無之、只はやく打申が肝要にて候。爰をよく合點仕候得と被仰候。

一、厨人に御賞美無之御趣旨

只今御城に御料理の間と申間有之候。此間へ台徳院様毎度出御被遊、御咄の相手に成候衆、大かた極り有之候。其時分俄に鯉を獻じ申者有之候て、幸何某に庖丁被仰付御覽被成候。鯉の庖丁は、鯉の脊中を庖丁の裏にて三度撫候て、切申ものと申候。撫申時鯉はね候てまな板より落申處を、まなばし取直し候て、鯉の兩眼をひしと刺とほし候て、其まゝ庖丁いたし申候。満座興に入候て、手のきゝ申を感じ申候。上様にも御覽被成候へかしと存候へば、折ふし脇を御覽被成候。右の首尾を御覽不被遊候哉と、各存候て残念

がり申候。扱御前にて一統に其儀を申候て、何とぞ御賞美も有之様にと、色々取成候得とも、とかくの御返事無之候。其後右の鯉御料理に成申候。風味格別に候とて皆々感じ、其上にて又先刻の庖丁は、扱も見事成事と申候。其時上様被仰候は、何も先刻より庖丁の事をひたと申出候。某に賞美も致し候へと被存候ての事と被思召候。かやうのちひさき事に賞は不行ものにて候。惣じて賞罰はつり合申さねば、賞罰共に立不申候。此庖丁を賞し申候は、害も無之事に候へども、左候はゞ重て又鯉を取落し不調法成時、それを罰せられねげ成申さず候。何も心得あしきと被仰候。

一、伊達中務、神君の隠語を解く

太閤の時、權現様伏見の御屋敷に被成御座候時、本多佐渡守、只今の長屋住居にて居被申候。其時分仙臺の政宗事、關白秀次御生害の後、御吟味有之候へば、政宗より大分の音信を秀次へ仕事相知、太閤以の外腹立、秀次同類の沙汰におよび、急々政宗を伏見へ呼寄被申候。政宗は京迄來て閉門して居ながら、伊達中務と云家老を以、本多佐渡守迄、此度の儀偏に奉願候。伊達の家を御取立被成と被思召候

て、太閤の御前、御取成被下候様にと申越候。權現様御聞被遊、其中務こゝへ呼候へと被仰候。則御前に罷出候。權現様にはこだつに御手をさし入、御あたり被成ながら、中務口上を御聞被成、扱何の御意も無之、今朝早天に罷越候て、腹申すき可申候間、それにて料理振廻候へと被仰候。

則權現様も御膳被召上候。中務は次の間御側近にて御相伴申候。上には御食鉢出不申候。不審に存候へば、こだつの上に御食鉢有之、御ふとんの下より取出候てつき申候。扱被仰候は、其方めしはひえ可申候間、此鉢のめしをと被仰候て、其鉢のめしを被下候。御膳過候ても餘の御咄にて、御返事は不被仰付候故、中務、佐渡守に向ひ申候は、政宗待遠に可存候間、御暇可申上候。此御懇意爲申聞候はゞ、忝可奉存旨申候。其時被仰候は、誠に返事聞度可存候、こゝへ寄候へと被仰候ゆゑ、にじり寄候へば、まつと寄候へと被仰候故、御側へ寄候へば、其方が主人ほど腰ぬけは有間敷候。先年も呼付られ、又此度も此仕合にて候。とかく主人は腰ぬけ候へば、何事を云ても甲斐も無之候。此上は其方ども料簡有之事と被仰候。扱太閤へ被仰上候は、承候へ

は太閤の少將御呼被成候由、如何の思召に候哉と被仰候。

太閤其時、されば仙臺の次郎が、わるさいたし候故呼寄置候由。其時内府被仰候は、少將事は、私へ被仰付候て、引寄打て捨候ても成申事に候。久敷家に候故、國に罷在候家子郎黨共、籠城など仕候はゞ人数を被指向、騒動に及可申候間、少將事御免被遊候はゞ可然存候。若又御免難被成儀に候はゞ、急に御成敗被成、早々奥州へ人数むけられ、御つぶし被成可然候。か様にべんべんと被成置候ては、國に罷在候者ども、一味同心に罷成、むづかしく可有之候。御料簡被成可然と被仰候へば、太閤、とかく近習の者共を少將方へ遣候て、とくと存念承届可申と被仰候。京都旅宿迄使者兩人被遣候處、上使とて迎にも家來共出向不申、各甲冑して弓鐵炮手にく携候て、上使に構不申故、兩人の衆も玄關に見合候て居被申候處へ、政宗髪も取さばき、らつしも無之躰にて走り出、上使をむかへ被申候て、着座の後被申候は、扱々只今迄上様の御恩を不存候。今日始て御恩の深き事を存候。私今度上様に御勘氣を得申候へば、あれ御覽被成候へ。私申儀も且て承引不仕、各様上使とて御